



経営の散歩道

川中経営所長 川中清司

▼お盆にはご先祖の霊を家に招いて供養する、おしょうらい(精霊)さんの行事がある。

戦前はあちこちの家で行われ、福井は七月の新盆にするところも多かった。

▼仏壇の前に紙燈ろうを吊る。キュウリやナスに白い麻木の足をつけて牛や馬をつくる。

西瓜やトウキビ、モモにブドウなど盛り籠にいっぱいの野菜や果物、それに赤いホウズキもかざった。

▼毎朝、小さなお膳に精神料理を捧げる。「おりごさん」と呼んでいた。

お供えしたご飯や煮物に、柳の小枝で水を振ってたむける。ガラス鉢の中には小指の頭ほどの白玉のダンゴが、涼しそうに並んでいた。

畳にユトンを敷き、障子は青いうす絹や簀(す)の子。あけっぱなしの縁側に風鈴が鳴ると、座敷の紙燈ろうがかすかに揺れた。

▼お盆の終りにはお精霊さんをお見送りする。

紙燈ろうに灯をともし、棧俵にのせて足羽川に流した。

ゆかたの尻をつまげて、川藻にすべらないようにそろりそろり、膝のあたりまで水につかる。ひんやりとした冷たさが太もも



を濡らす。

夜のしじまの中に、淡い月かげと燈ろうのあかりが川面に浮かぶ。

すいっと棧俵を押しだすと、揺れながらやがてゆっくりと流れます。

「さようなら。来年もまた来てちょうだいね」

お経をとなえ手を合わせる。静かな平和な、お盆の夜だっ

た。
▼つぎの夜。一変して足羽川は地獄となった。

猛火のがれた数百・千の人間が河原にうごめいていた。

全身にやけどを負って泣き苦しむもの。肩を砕かれて呻きもだえるもの。頻死の子供を抱えた母の叫び。「助けて。だれか助けて」。

昭和二十年七月十九日の夜、アメリカ空軍のボーイングB29・

百二十機が、福井市を襲い焼夷弾の雨を降らせた。

第七十四回

盆の蟬

民家も病院も学校も、街全体が忽ち火の海と化し、逃げまどう多くの市民が焼き殺された。

▼「どこかに生きていてくれ」親を探し求める子の眼は気狂いのように吊り上っていた。

どんなにケガしていてもよい、生きてさえいれば。神に祈り仏に念じた。機夜も寝つかれず疲れ果てて、ふとまどろむ中に血みどろになりながら微笑む親を

夢みて、ハッと飛び起きる。
▼まだ親に甘えたかった。ましてや着のみのまま、一瞬に父と母と家を失った衝撃には耐えられぬ。

なんで殺されたんや。僕だけなんで生きてるんや。死んだ方がよっぽどましや。

▼郊外の学校に収容された重傷の人々を尋ね回り、虫の息の顔をのぞきこむ。

黒こげの丸太棒のように道端にころがる焼死体の悪臭も気にならず、もしかしてわが親かと歩み寄る。

死体の大きさや僅かに残る顔形から「いや、わが親ではない」と、強いて自分に言いよかせた。

▼油蟬が炎天に鳴きじゃくる。悲しみに焦れて胸がはりさける。

十数年も地中にもぐっていてやっこの世に出てきても、鳴き通して一夏で命を終える。お前はいつたい何のために生まれてきたのだ。

それよりも自分はましなのだ。いま、悲しみをのりこえて生きていかなあかんのや。

▼あれから五十年たった。今年も、お盆の蟬が鳴いている。